

青森・弘前城の曳屋工事 事業支える米沢の職人

家族への思い胸に

世紀の大プロジェクトを支えているのは、米沢の職人たちだった。青森県の弘前城本丸で進む天守の曳屋（ひきや）工事。彼らは使命感を持って地道な準備を繰り返して、亡き祖母への感謝、生まれたばかりの子どもへの夢を胸に、作業に日々、打ち込んでいた。

Ⅱ 1面に関連記事



「いくぞー」。職人を率い からの約60分動いていた。2 我妻組(米沢市)取締役工 師ほど持ち上げられ、井桁 事部長・石川憲太郎さん (いげた)に組んだレールの (40)の大きな音が秋晴れの 上の台車に載っている。中 空に響く。7日午前、天守の 央部分にはターンテーブル 回転作業が始まった。重さ が設置され、これを軸に四 400トのそれは元の場所 隅の台車を油圧式ジャッキ

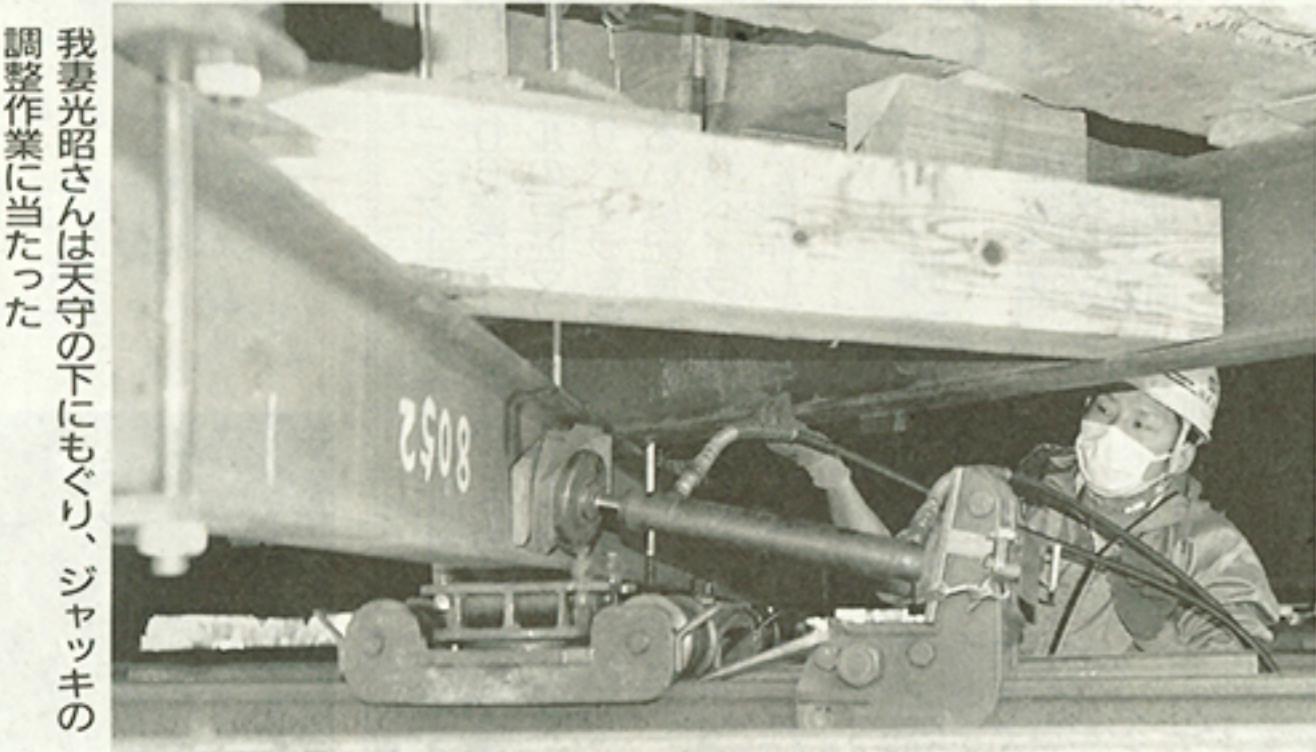
使命感持ち、プライド懸ける

で押して滑らせ、回す。 石川さんは5分ほど離れ た場所で制御盤を操る。作 業を開始して間もなく顔が ゆがんだ。「おかしー」。 天守に駆け寄る。四隅のジ ャッキのうちの二つが作動 しない。機材を点検し、や り直したと思うように圧力 がかららない。 制御盤のスイッチやつま みを調整し、不具合を起こ したジャッキにほかの3基 より強く加圧。全体に均等 に力がかかるようにした。 これを1時間半で10回行 い、予定通り約30度、時計 回りに天守を回転させた。この日 我妻組は1961(昭和 36)年に創業。以来、全国 の寺院や学校などの曳屋を 数多く手掛けてきた。その 技術が元請けの地元業者に 認められ、今回の事業を受 注。最大5人の職人が7月 から弘前市内に寝泊まり やり遂げるから見ていて、 「見守ってくれたから、う まくいっているんじゃない かな」と続けた。

この日、もう一人、我妻 組から回転作業に携わった のが我妻光昭さん(31)。石 川さんと共に7月から現場 に立ち続け、ジャッキの調 整などを担当した。「作業 の一つ一つに神経を使う。 うまくいくとホッとす。 その連続」 そんな我妻さんは今年3 月、父になった。「男の子。 会いたくて仕方ないが仕事 だから。いつか息子をここ に連れてきて、父ちゃんが この城を動かしたと教えた い」。はにかむような笑顔 を見せ、たばこの煙をフー ツと吐いた。



油圧式ジャッキの制御盤を操る石川憲太郎さん。使命感を胸に職人を率いる
＝青森県弘前市・弘前城本丸



我妻光昭さんは天守の下にもぐり、ジャッキの調整作業に当たった

炎天下、蒸し風呂のよう な天守内で地道な作業が続 いた。「最も大変な工程だ った。職人としての使命感 直した。(米沢支社・橋拓

弘前城は弘前藩の居城として江戸時代に築かれた。その後、火災で焼失し、現在の天守は江戸後期の再建。石垣は前回、曳屋が行われた明治後期から1915(大正4)年にかけて改修された。今回は天守下の石垣が外側に膨らみ、崩落が懸念されるため弘前市が国の補助を受け、約20億円を投じて10年に及ぶ大改修を実施する。天守は国の重要文化財。石垣改修後の2021年には再び曳屋によって元の位置に戻す計画。城のある弘前公園は国内有数の桜の名所として知られる。

メモ